慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	情報処理の単純化の為の枠組としての「態度」及び「文化的文脈」
Sub Title	"Attitudes" and "cultural contexts" as frameworks for simplifying information processing
Author	榊, 博文(Sakaki, Hilobumi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.485- 506
JaLC DOI	
Abstract	Since human ability to process information has its limitations, over-stimulation would result in meatal disorders. Man however discriminates between information which should be processed and which should not be processed by using frameworks for evaluation, i.e., "attitudes", in order to involve him-/herself in society. Similarly, a "culture" selects among the alien innovations that are endlessly pressing in on it by using "cultural contexts" to maintain itself. This paper states that individuals and cultures have "attitudes" and "cultural contexts" respectively to simplify information processing and that this hypothesis is based on homeostatic mechanisms.
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Treatise
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0485

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

情報処理の単純化の為の枠組としての「態度」及び「文化的文脈」

榊　博　文*

"Attitudes" and "cultural contexts" as frameworks for simplifying information processing

Hilobumi Sakaki

Since human ability to process information has its limitations, over-stimulation would result in mental disorders. Man however discriminates between information which should be processed and which should not be processed by using frameworks for evaluation, i.e., "attitudes", in order to involve him-/herself in society. Similarly, a "culture" selects among the alien innovations that are endlessly pressing in on it by using "cultural contexts" to maintain itself. This paper states that individuals and cultures have "attitudes" and "cultural contexts" respectively to simplify information processing and that this hypothesis is based on homeostatic mechanisms.

* 慶應義塾大学文学部助教授（社会学）

1. 態度概念について

説得的コミュニケーションの効果は，相手の態度，意見，行動の変容によって測定される．しかし，「態度」の一般的な解釈によれば，「意見」とは態度が言語的に表現されたものであり，また「態度」は認知（ある対象に対する見方，評価），感情（対象への好き嫌い），行動（対象への接近・回避傾向）の3つの側面（成分）をもつと言われており[(1)]，これらの解釈からすれば，説得的コミュニケーションの効果は，相手の「態度」を測定すれば十分であることになる．従って，説得による相手の意見や行動の変化は，態度変容であるとみなして構わないのであるが，表面的な意見や行動が変っても「態度」が変ったとは必らずしも言えないこともあり得るから，事態は少々複雑になってくる．

態度の定義として一般に広く受け入れられているのは，G．オルポートの「態度とは，個人が関係をもつあらゆる対象や状況に対するその個人の反応に，直接的，あるいは間接的な影響を及ぼす，経験によって組織化された，心的神経的な準備状態である[(2)]」という定義である．つまり，態度とはある行動をおこさせるもとになるもの（準備状態）であり，その人の行動をその人独特のものにするという点において，「気質」や「パーソナリティ」と同じであるが，後天的に形成されるという点において「気質」と区別され，ある特定の対象や状況に対して向けられるという点において「パーソナリティ」と区別される．

「心的神経的準備状態」の意味は，人は行動をおこす前に精神的に準備をする，つまり心構えをするが，身体的にも準備する，つまり身構える，ということである．このことは，H．スペンサーのいう“mental attitude[(3)]”（精神的態度）と，N．ランゲのいう“motor attitude[(4)]”（運動的態度）に相当し，G．オルポートは「態度」とはこの二つの側面をもつと考えていることになる．

さて，筆者はここで態度について，従来の解釈とは少し異なる解釈を試みてみたい．カナダのマッギル大学で行われた感覚遮断の実験は，人の脳に五感を通して通常の刺激が与えられない場合，人に精神異常をきたす可能性があることを示した．一方，現代社会における急激な社会変化，情報量の増大，多数の人間との一時的接触，選択や決定の増大など，人に対する過剰刺激も又人に多くの精神異常や神経症反応をおこさせる．

言うまでもなく，人間の情報処理能力には限界がある．1時間で暗記できる英単語の数には限りがあり，1日に50人に面接したら疲れきってしまう．人は2人の人が同時にしゃべるのを聞き分けることすらできないし，すべての新聞，ラジオ，テレビ，雑誌などを視聴することは不可能である．しかし，人間は新しい刺激や情報の氾濫をただ手をこまねいて見ているわけではない．人間は新しい刺激や情報が自分の脳に無制限に入力されるのをコントロールする知恵をもっている．何千万，何億という刺激が人間の五感に呈示される時，人は入力すべきものとそうでないものを意識的，無意識的に取捨選択している．

人は，他の人や政党，企業，国家など，ありとあらゆるものにレッテルを貼りたがる．「野党はいつも“反対”ばかりだ」，「あの人を議員にしておけば村のために働いてくれる」，「とかくソ連ときたら……」，「あの会社の製品なら大丈夫」，「あの国の製品は故障が多い」等々．権威主義的性格者や独断家だけに限らず，多くの人は極端にあいまいなものやどっちつかずのものをあまり好まず，多かれ少なかれ白か黒かという決め方をする．レッテルを貼るということは，臭い所を通る時鼻をつまむようなもので，多すぎる情報即ち不快なものをシャット・アウトすることに他ならない．人は対象に対してレッテルを貼ることによって，情報過多からくる心理的・身体的不安定を無意識のうちに防衛している．

換言すれば，人はある一定の枠組（フィルター，サングラス）を通して物を見ている．サングラスの色やその濃さ，そして枠の大きさは人によっ

て異なる．サングラスの色が濃く，フレーム（枠）の狭いサングラスをかけている人は限られたものしか見ていない．一方，サングラスの色がうすく，フレームの大きいサングラスをかけている人は，比較的公正に広く物事を見ている．しかし，サングラスなしに物を見る人は皆無である．

このように物を見るためのフィルターが一たび完成すれば，人はもはや過剰刺激に悩まされることはなくなる．その特殊フィルターにうつらない，或はその枠からはみ出しているその他の多くの情報を捨て去ることができる．この枠組によって面談する相手を 50 人から5人に減らすことができ，読む新聞や雑誌もおのずと決まり，しかも隅から隅まで読む必要もなく，見るテレビ番組も限定される．いろいろ迷いながらも投票すべき人物が一度決まると，他の候補者のことはもはや考えなくてもよい．政治家は支持者や支持団体を一たび獲得すると，余程の失敗がない限り彼らの支持を失なうことはない．企業も又消費者に自社の製品を認めさせることに一たび成功すると，余程の粗悪品を作るか他社が余程の優れた製品を作らない限り，消費者を自社に引きつけておくことができる．消費者はその会社の製品を個別に検討，評価したりはしない．「あの会社の製品なら何でも大丈夫」なのである．政府，企業，政党，団体などの宣伝をする側にとって人のこのような傾向は実に有用なものであり，一たびこのようなフィルターを人々にかけさせれば，宣伝者はあまり努力をしなくても，人々は自分たちを支持してくれる．宣伝者は人々にこのようなフィルターをかけさせることの効果を利用しない手はない．

一方，人々は宣伝者の宣伝によって歪んだ，或は誤ったフィルターをかけないように常に注意を払わねばならない．しかし，人々にとってこのようなフィルターをかけることのメリットは，何千万，何億という情報を逐一処理することなく思考や判断の手続きを極めて簡略化し，その手間と時間を節約してくれるということなのである．ひいては自分の脳が正常に働き，精神異常になるのを防いでくれている．だから人は比較的早くフィル

ターをかけたがり，いろいろな対象に対してそれぞれちがうフィルターを何種類も持っている．勿論，それらのフィルターは相互に一貫性を保っている．

若者よりも年寄りの方が，対象にレッテルを貼りたがるのは，無論長年の人生経験がそうさせているのだろうが，脳の神経細胞の数が減り情報処理機能が確実に劣えて，レッテルを貼らないことには脳が正常に機能しなくなったからという面もあるのかも知れない．企業経営者が年をとり，急激な社会変化や技術の変化，或は消費者の嗜好の変化などをうとましく感じたり嫌になったりしたら，直ちに引退すべきである．“変化”を面白いと感じるようでなければ，新しいフィルターをかけ，社会の変化に対応していくことはできない．いずれにせよ筆者は，このような判断のための枠組であり，情報処理を簡素化するのが「態度」であると考えている．態度とは即ち，サングラス，フィルターのことである．

2. 態度概念と類似の概念との相違

態度に対する筆者の考えを更に述べる前に，態度と類似の概念について触れておこう．前述のように，「意見」とは態度が言語的に表現されたものであるという従来からの見解がある．確かに態度に由来する意見は存在するだろう．人はいろいろな考え，つまり思いつき，印象，着想，観念，見方，推測などを持っており，これらのものを統合したり或は分離したりしながら，新しい考えを生み出していく．このことは大脳によってなされる精神活動であり，その人にとって重要な事柄やあまり重要ではない事柄も含めて，その人が抱える問題の解決に向けてなされる．既存の多くの考えを統合，分離し，時にはひらめきも交えて問題解決や未来予測をしようとする精神活動の過程は，「思考」の過程である．その思考の結果としての十分整理された，或はまだ十分整理されていない新しい考えが言語的に表現された時，その考えを「意見」と呼べばよいのではないか．

「今日は暑い!」という台詞は単なる感嘆の言葉であって意見ではない.「今日は暑いからプールに泳ぎに行こう」というのは，そこに問題解決をめざした思考のプロセスがあるから意見である．意見は十分自信をもって表明されることもあるし，あまり自信なしに表明されることもある．この時におこなわれた思考は，態度という枠組に従ってなされることがかなりあるだろう．新しい考えや新しい意見は，自分が従来からもっていた態度と一致・一貫していることを人は望む傾向があるからである．態度という枠組に沿って思考された「考え」が言語的に表現されたものは立派な「意見」である．例えば，アメリカに対して好意的な態度をもっている人が，米軍の日本基地使用に対して賛意を表明したり，在日米軍の駐留経費の一部を日本が負担することに賛意を表すのは，態度に由来するものである．

しかし，「思考」というプロセスを経て言語的に表明されるものは，「態度」からのみ出てくるのではない．宇宙物理学者などの科学者が既存の高度に専門的な知識を統合・分離して「思考」し，それが新しい「意見」として発表される時，その「意見」は「態度」に由来するものではない．医師が患者の病名や治療法について自己の見解を発表するとき，その意見は医師の個人的態度に由来するものではない．判決の中にみられる裁判官の意見は，自分の態度とは中立のものであるはずである．このように学説，医学的見解，判決などは「意見」であるが，「態度」に由来するものではない．

即ち，「意見」とは問題解決に向けて思考された考えが言語的に表現されたものであり，態度に由来するものもあればそうではないものもある．意見には熟考度の高いものから低いものまで様々あり，意見として言語的に表現される前の段階のものが「考え」である．「考え」とは，アイデア，印象，イメージ，ひらめき，見方，思いつき，案，着想，観念，もくろみ，見解，構想，想像，空想，憶測，自説，所信，持論，判定，評価，評定，意図，確信，思想，理想，信条，学説などのことであり，これらは事実や知識，経験，更にもっと基礎的な熟考度の低い「考え」に基づいて，大脳

が問題解決や未来予測に向けて精神活動をする，即ち「思考」することによって形成されるものである．

さて，態度は感情的色彩をもち，意見は感情から中立でいられる，という従来からの見解があるが，これも疑わしい．態度の形成は，欲求充足の過程，集団からの影響過程，情報への接触過程の3つの過程を経てなされるのであり，この3つの過程が同じであっても人の態度が異なることがあるのは各人のパーソナリティが異なるからである[(5)]．態度の形成過程を考慮に入れるならば，態度という枠組に沿って思考された意見は感情的色彩を帯びているだろう．

例えば，欲求充足の過程を例にとると分りやすい．赤ん坊にとって母親は，一般的に言って自分の欲求を満足させてくれる対象である．ミルクや食物を与え，不快な排泄物を取り除き，暑くもなく寒くもないように衣服や寝具を調整してくれ，おんぶやだっこをして適当な快感を与え，やさしく微笑みかけてくれる対象である．自分の欲求を満足させてくれる母親に対して子供は，次第に好意的な態度を形成していく．母親に関する意見を子供が言うとき，そこには感情的色彩があることは容易に想像がつく．もしその母親を誰かが非難したり，自分と母親を引き離そうとする人物が現われると，その子供は非常に感情的な抵抗を示すだろう．集団からの影響，及び情報への接触によって形成された態度も同様に感情的色彩を帯びているものと思われる．意見が態度に由来するものであるなら，やはりその意見は感情から中立でいられることはないだろう．

一方，科学者，法律家，医師，一流の政治家，一流の評論家などが自分の学説，判決，所信，所論を述べるのは意見ではあるが，これらの意見は態度に由来するものではない．これらの意見は学問，事件，社会情報などについての極めて理性的かつ客観的な思考の産物であって，感情的色彩は伴っていないだろう．もっとも，多くの評論家や政治家の所論は態度に由来するものであるかも知れない．それはその人のイデオロギー，思想，価

値に立脚しているのであり，そのこと自体は別に非難されるべきことではなく，その人の立場上むしろ当然のことではあるが，感情的色彩を帯びていることは疑いない．又，逆に，学者や法律家だけに限らず，一般の人においても「態度」という枠にとらわれずに客観的に思考され表明された意見は存在しうる．すなわち，感情的色彩によって態度と意見を分けるのはあまり意味がない．

又，“意見はトピック的なものや短期的な事柄について述べたもので，態度はもっと持続的で抱括的である”という説や，“態度は意見よりももっと安定した，あまり言語化されやすくないものである”という説もある．又，“意見とは，信念，態度，或は価値の言語的表現である”という説もある．

これらの説は意見というものがすべて態度に由来することを前提としており，態度に由来する意見ならば上述の解釈は一応そのような面もあるとして肯定されうる．しかし，意見とはトピック的なものや短期的事柄に関するもの以外に，長期的事柄に関する意見や漠然とした意見も存在しうるし，自分の態度自体の表明もありうる．又，表明された意見が状況的要因，例えば権力者の存在，によって自らの態度と全く相入れないものになってしまうこともあるだろう．英語の“opinion”という言葉には，長期的意見・短期的意見という時間的パースペクティブに沿った区別はなく，断定は出来ないが恐らくそうであろうという判断のことをいうようである．

一方，意見そのものが態度であるという説もある．ここでは意見や評価(評価的意見)が態度と同義である．態度が，人が行動をおこす前の準備状態ではなく言葉であらわされたものそれ自体であるとするなら，その測定は極めて容易となる．「測定」のしやすさという観点に立てば，このような定義に魅力を感じないわけではない．態度研究も態度変容研究も大きく前進するかのようにみえる．しかし，筆者は態度と意見の用語上の区別をつけておいた方が今後の研究の発展のためになると考える．態度測定や態度

変容に関する研究は，状況的要因によって常に変わりうる可能性をもつ，表面的でどこまで本心か分らないものを扱うより，もっと安定したものを扱うべきである．このことは行動の予測という点からも指摘される．安定したものを測定するのでなければ行動の予測は立てにくい．更に，態度が評価的意見と同義であるとするならそこに態度の感情的側面が欠落しており，この感情的側面を考慮に入れなければ行動の予測はもっと立てにくくなる．ある対象を高く評価しても，必らずしも人はそれに好意的感情を抱くとは限らないし，それに接近するとは限らないからである．

筆者は，態度とは外からは見えないブラック・ボックスであり，外にあらわれた意見や行動を通して推測する以外にそれを知る方法はないと考える．顕在化された意見や行動は態度を反映しているが，「態度」そのものではない．又，態度と無関係の意見や態度に反する意見・行動の存在を考慮に入れるとき，それらをもって態度と同義とすることは出来ないのである．

態度とその他の類似の概念との比較について，M．ロキーチの所説[6]を参考にしながら述べておく．彼は諸信念の集合が態度であると考えている．諸信念は認知，感情，行動の3成分をもつ故に，態度も又その3成分をもつという．彼は信念 (belief) について特に詳しく触れてはいないが，信念とは一般的には自分がそのように認めていることをいう．信念と態度の関係は定義の問題であるから，ここではそのような関係を認めることにしよう．

「価値」について彼は“信念の1つのタイプであり，その人の全信念体系の中心に位置している”，更にそれは“行為の理想的な型や最終目標に関する信念である”という．行為の理想的な型とは，真実，美，清潔，秩序，誠意，謙遜などをもって行動することであり，理想的最終目標とは，安全，幸福，自由，平等などのことである．彼はのちにこれを「手段的価値」と「目標的価値」とし，それぞれ18個の価値を提案している[7]．

M．ロキーチの所論を要約すると，信念体系とは価値，態度，信念から

成り，最も抱括的なものである．価値は信念体系の中心に位置し，態度とは信念体系のサブ・システムの1つである．信念とはその態度を構成する要素 (element) である．即ち，“成人した大人は，恐らく1万の信念と100の態度と，1ダースの価値をもっている”という．100の態度とか1ダースの価値というからには，態度や価値には種類があるとロキーチは考えているのであり，その数はいくつでもよいのだが，その種類とは何かが問題になってくる．これを探る手掛りとなるのが恐らく“態度構造”という概念であるが，これに関しては後述する．

態度とは判断のための枠組（フィルター）であると先に述べたが，「バイアス」というのはこのフィルターが極端に濃くその枠組が極端に狭いものをさす．人は他者やその他の多くの対象に対して先入観をもって見たり接したりするが，それは好意的な場合と非好意的な場合の正負両方がありうる．「偏見」とは負の方向にかかるバイアスであると言ってよいだろう．権威主義的性格者や独断家はこのフィルターの色の濃い人である．

3. 情報処理の枠組としての「態度」

態度とは判断のための枠組であるというこの解釈と，従来の態度の定義の関係について述べよう．

精神分析的立場——態度とは力動的，無意識的なもの
社会学的立場　——社会的・文化的な影響を受けているもの
学習理論的立場——学習されたものであり，反応の一貫性そのもの
認知理論的立場——反応の準備状態
クレッチとクラッチフィールド——永続的な構え
ニューカム　——刺激と反応を仲介する媒介変数
ロキーチ　——先有傾向

結論を先に述べるならば，筆者の態度の解釈は従来のそれと特別矛盾するものではない．筆者は，態度とは 1) 判断のための枠組であり，2) 後天的に形成され，3) 一定期間持続するものである，と考えている（定義については後述する）．1) の概念の中に，反応の準備状態，先有傾向，刺激と反応を仲介する媒介変数，という概念がくみ込まれる．2) の概念の中に，社会的・文化的な影響を受けているもの，学習されたもの，という概念が内包される．3) の概念の中に永続的構えという概念がくみ込まれている．

尚，判断のための枠組は，本人に意識されているものと無意識のものとがあるのは当然であって，この概念は精神分析的立場と矛盾するものではない．精神分析的立場は，態度の無意識的側面を強調しているが，すべての態度が無意識のものであると言っているわけではない．

しかし，筆者の解釈は，反応の一貫性そのものが態度であるとする学習理論的立場とは両立しない．筆者は，態度は判断（反応）のための枠組であって，反応そのものではないと考える．従って，どちらかと言うと認知理論の立場に立つものであるが，しかし認知理論的立場からは判断のための枠組という積極的な考えは出て来ない．

態度の機能として筆者が特に強調したいことは，情報処理の簡素化，能率化である．これは反応の準備状態とか反応の一貫性といった消極的なものではなく，生物的，社会的人間としての適応，生存につながるもっと“積極的な意味”をもつものなのである．もし，人間がこのような枠組やフィルターを通して物を見るということをしなかったら，我々は何千万，何億という新しい未知の情報をすべて処理しなければならなくなる．それは冒頭に述べたように人を精神異常においやるが，人は「態度」という判断の枠組によって，正常な精神状態を保っているのである．態度に対する筆者の解釈は，それが判断のための枠組であり，その機能は情報処理の簡素化であるという点が，従来の解釈と異なる[8]．態度には，認知，感情，行動の3成分があるとする説も筆者の解釈と矛盾しない．判断のための枠組は，

認知（良し悪し），感情（好き嫌い），行動（行動にうつすか否か）という大別して3つの側面の判断のための枠組であると考えられるからである．

「信念」については，判断のための枠組を構成する1つのエレメントであるとして処理できる．態度とは枠組だからである．「価値」も判断の為の枠組であるから，筆者によれば「価値」も態度の一種である．M．ロキーチのいうように，行為の理想型や終局的理想に関する特別の枠組であると考えてよいだろう．しかし，価値は態度よりも人のパーソナリティのもう少し深いところに根ざしているだろう．態度が1年から5年のオーダーで変わりうるとすれば，価値は5年から 10 年のオーダーで変わりうる．しかし，一夜にして価値観が変わることもありうるから，この区別は厳密なものではない．

「イデオロギー」とは，M．ロキーチは宗教的，政治的，哲学的判断のための「信念」であると考えているが[9]，筆者はイデオロギーは態度と同じ次元にあるものであり，態度そのものであると考える．

人は多くの事柄（対象）に対する知識をもっている．そこから多くの信念が形成され，それがイデオロギーをはじめとする「態度」を形成する．そして，その人の価値観が形成されていく．しかし，一度形成された「価値」は逆にその人の態度や信念に影響を与えていき，態度も又信念に影響を与えていく．特に，態度は新しい信念を形成する際のフィルターとして働くのであって，価値，態度，信念は相互作用をおこしていると言ってよい．（日本の多くの社会心理学関係の書物は，英語の Belief をそのまま信念と訳しているが，信念という日本語は日本人にとってなじみの深い言葉ではない．M．ロキーチは前述のように，人は1万の信念を持っていると述べているが，日本語の用法からすれば人は1万の信念を持っているとは言いがたい．Belief の意味は，日本語でいう“考え”という言葉に近いのではないだろうか）

態度に関する筆者の解釈自体は特別新しいものではない．例えば，M．

ロキーチ[10]は“態度が選択的反応を導くことに多くの研究者は同意している”と述べているが，同時に“選択的反応の基礎は明確ではない”と述べている．L．フェスティンガー[11]は，選択的接触の理由として認知的不協和をあげている．認知的不協和は不快であり，認知的協和は快であるがゆえに，人は不協和をもたらす情報を回避し，協和をもたらす情報に接触する．不協和低減の行動を含む人のこのような行動は内因的動機づけに基づくものであるとして，彼は態度の選択的反応の基礎を説明するが，何故協和が快であり不協和が不快であるかについての言及が欠けている．

その後他の研究者によって，人の不協和低減の行動が内因的動機づけであるとする説への疑問が提出されたが，筆者はそれはやはり内因的動機づけであると考えており，「ホメオスタシス」の概念でそれを説明できると考えている．人の身体は一定量の水分，塩分，その他を必要としており，それより多くても少なくても人は生物として生きていくことは出来ない．人間の脳も又身体器官の一部であり，塩分，酸素などに関するホメオスタシスを求めると同時に，精神活動をつかさどるという意味でその他の身体器官とは特殊であるこの器官は特殊なホメオスタシスのメカニズムを有していると考えられる．人の身体が肺を通して酸素を必要としているように，脳も又眼，耳などの五感を通して“刺激”という栄養を必要としている．胃にとっての食物の量や筋肉にとっての運動の量が多すぎても少なすぎても人間の身体にとって害となるように，脳にとっての“刺激”も又多すぎても少なすぎてもいけない．多少の個人差はあっても，人がある一定量の刺激を求めることは，多少の個人差があっても人が一定量の食事を求めることと極めて似ている．

このように，人が一定量の刺激や一貫した情報を求めることは，脳のホメオスタシス的メカニズムに起因しているのではないだろうか．前述したように，この脳におけるホメオスタシス追求は，人が社会的人間として社会に適応していくのに必要である以前に，まず生物的存在として生きてい

く上で，人間に課せられた基本的メカニズムなのである．

このように考えると，M．ロキーチ[12]の選択的反応の基礎は明確ではないとする叙述に回答を与えることが可能となる．つまり，選択的反応の基礎は脳のホメオスタシス的メカニズムなのである．L．フェスティンガー[13]のいう，不協和は不快であり協和は快である，という見解もこのメカニズムで説明することができる．人がもし選択的な反応をしなければ，相互に不一致な情報を含んだありとあらゆる情報を処理しなければならなくなり，それは人の脳の情報処理能力を超え，脳が正常に機能するのを破壊する．

つまり，『態度とは，脳のホメオスタシス的メカニズムに基づいた，情報処理の単純化のための判断の枠組であり，後天的に形成され，一定期間持続する，行動のための準備状態である』．これが筆者の態度の定義である．

態度の選択的反応は態度そのものの維持や保存に対して向けられるのであり，G．オルポートをはじめとする多くの態度の定義はこのことを説明できない．このことはホメオスタシスという，態度の奥にある内的メカニズムを仮定してはじめて説明がつくのである．

説得をするということは相手の態度を変える，つまり新しい態度を採用させるということなのであるが，上述のように考えるとその意味は，“もしあなたがこのような新しい態度を採用すれば，あなたの情報処理の手続きはこんなにも簡単になりますよ”ということであることがわかる．実際の説得時にはこのような論理でのアプローチが採用されてよいだろう．もうひとつのアプローチは，“人は面倒なことが嫌いである”，“多すぎる情報は避けたがる”ということから出発して，相手を情報洪水の中に埋没させたり非常に面倒な事態に追い込むなどして，そこから早く逃げだしたい，早く楽になりたい，という気持にさせることである．相手の情報処理能力を超えた情報過多の環境のもとでは相手は遠からず逃げ出すにちがいない．これは一種の神経戦でもある．

態度とは情報処理の簡素化のためのフィルターなのであるから，状況や

時代が変化して旧来の古いフィルターによる対応が困難になると，人は自らのフィルターを新しいものに変えなければならない．第2次世界大戦後，“転向”した人たちの中には妥協や打算でそうした人たちもいたかも知れないが，上述の理由でそうした人もいたと思われる．彼らは新しいイデオロギーというフィルターを採用することによって，変化した社会に適応したのである．

もっと身近な問題で人を説得する場合も，新しいフィルターを採用すると状況の認識，思考，判断などがこれだけ正確に，効率よくなされるという点をもっと強調する必要があるだろう．人が自らの態度を変えるのは，自己と周囲の状況をそのように認識した時なのである．

4. 情報処理の枠組としての「文化的文脈」

個人における「態度」の概念を集団や社会にまで拡大すると——このような類推は集団や社会を擬人化し生命有機体として考えていることになるが——それらは集団規範或は社会規範と呼ばれる．集団規範や社会規範は，集団や社会にとっての判断のための枠組であり，情報処理や問題解決を簡素化，効率化している．それらは集団や社会が自らを維持するために存在し，個人を社会に同調させ，無用の混乱を避けるために存在する．自らのフィルターに合わない人やその動きは不文律や法律によって“取り締る”ことができる．個人は規範に沿わない行動をとるとき，それらによって社会的制裁を受ける．それ故に個人における態度も社会における規範も，そう容易には変化せずより長く存続することができる．「反社会的態度」は存在するが「反社会的気質」とか「反社会的パーソナリティ」は存在しない．従って，社会的制裁を受ける「態度」は制裁を受けるが故に比較的長く続くのであり，「気質」や「パーソナリティ」は社会からの影響をあまり受けずその人の自我の中心部に位置するものであるが故に態度よりも更に長く存続しうるのである．もっとも，所謂「社会的性格」或は「社会意識」

は，国家や社会によってその形成が強く影響されるので，それが「反社会的性格」「反社会意識」となる時，社会からの制裁を受ける．もっとも，「反社会的性格」者や「反社会意識」をもつ人は，社会変革の担い手ともなりうる．

S.E. アッシュ[14]によって，個人的判断は集団的判断に同調することが証明された有名な実験は，一たび形成された集団規範がその後の個人の判断に影響を与え，個人の判断を簡素化，単純化させてくれるものであることも示した．もとより，個人の態度は集団や社会の規範を反映したものであって，それらと独立に存在するものではない．保守的，革新的，全体主義的，個人主義的，宗教的，非宗教的，平和主義的，非平和主義的，権威主義的，非権威主義的，愛他的，利己的，快楽的，禁欲的，会社志向，家族志向，現実志向，未来志向，仕事志向，余暇志向，金銭重視，非金銭重視などといったイデオロギー的，価値的態度だけではなく，もっと小さな具体的事物に向けられる態度も又，多かれ少なかれ集団や社会の規範の内面化されたものである．

人が新しい態度を採用するのは，その人の周囲の集団的，社会的状況の変化に対応するために自ら態度を変化させていくケースもあるだろうし，周囲の人から説得され周囲の人に同調していくケースもあるだろう．同調していくケースでも，比較的早い時期にそうする人もいれば一番最後に同調する人もいるだろう．実際に社会が変化する前に社会変化を察知し，自らの態度を変えていく人もいるだろう．イノベーション，即ち新しい考え方，新しい行動の仕方そして新しい物を採用する人に関する E.M. ロジャーズ[15]の分類によれば，最も早く採用する人は先駆的採用者 (innovator) と呼ばれ，順に初期少数採用者 (early adopter)，前期多数採用者 (early majority)，後期多数採用者 (late majority)，そして採用遅帯者 (Laggard) と呼ばれる．先駆的採用者は異端者であると同時に社会変革をおこす，もしくはそのきっかけを作る可能性をもつ人でもある．

さて，上述の規範，価値，イデオロギー，法，不文律，秩序，制裁などはすべて「文化」という概念の中に組み込まれる．「文化」については別の機会に詳述することにして，本節においては宇野[16]が 1977 年にベルリンのシンポジウムで提出した「異文化間屈折理論」における「文化的文脈」概念と，上述の「態度」概念の関係について述べる．

異文化間屈折とは，ある文化集合内で生み出され，或は既に文化集合内に存在している概念，行動様式，人工物が，イノベーションとして他の文化集合に導入され普及するとき，そのイノベーションが当初もっていた意味，機能，形態，用途などが変化する現象をいう[17]．この理論によれば，イノベーションが無変化のまま普及することはむしろ稀で，多くの場合変化しながら普及するという．異文化間屈折理論は，イノベーションが異なる文化において変化しながら普及する現象を体系的に説明しようとするものである．

受容文化集合はさまざまな自然的，社会的，歴史的な先行条件をもっており，イノベーションとこれらの条件が複雑な相互作用をすることによって，イノベーションが屈折，即ち変化し，受容文化集合の中で文化的に統合されていく．この理論によれば，先行条件として次の 13 個の文化的文脈を想定している．

1. 気候風土的文脈
2. 生物形態的文脈
3. 言語的文脈
4. 慣習・習俗的文脈
5. 法文化的文脈
6. 政治行動的文脈
7. 宗教的文脈
8. 経済行為的文脈
9. 人間関係的文脈

10. 民族感覚・感情的文脈

11. 地方色的文脈

12. その他の文脈

13. 種々の文脈の合成的文脈

文脈に関するこのリストはすべての文化集合に存在しているものであるが，このすべての文脈が文化集合に入ってくる個々のイノベーションと相互作用を起こすと言っているわけではない．これらの文脈は通常は潜在的に存在しており，外来のイノベーションが入ってくるとき，それと関連のある文脈だけが刺激され表面に浮上してくる．

つまり，文化的文脈は外来のイノベーションを取り入れるか否かを自らの文脈に照らしあわせて判断するフィルターの役割を果していると言える．自文化に合わないものや好ましくないものは排除し，何らかの修正を加えれば取り入れてもよいものは，形態，意味，機能などが変化して取り入れられ，受容文化集合の中に普及・定着していく．文脈的適合の過程（変化していく過程）には，脱落，添加，置換，融合など 10 個のカテゴリーがあるという．

「文化」にとっての「文化的文脈」は，「個人」にとっての「態度」の役割を果しているといえよう．態度にとっての規範・文化に相当するものは，文化にとっては自然的，社会的，歴史的な先行条件である．「文化」とは自然的，社会的，歴史的先行条件の反映であるからである．ここに，文化は自然的，社会的，歴史的に規定され，態度は文化によって規定されるという図式が出来あがる．勿論，文化や態度が形成されたのちは，この規定はそれぞれ一方向的なものではなく双方向的なものとなる．

外来のイノベーションは常に無限に自文化集合に押し寄せてくる．鎖国政策をとっていた江戸時代の島国日本においてさえそうであった．現在のような国際化が進展し，実質的には国境がなくなりつつあるような時代では，外来の文化は怒濤のように入ってくる．そこでどれとどれを取捨選択

するかを決め，導入するものについても自文化に適合するように修正しなければならない．その役割を果すのが「文化的文脈」であり，外来のイノベーションという名の“情報”の処理を単純化・簡素化するために働き，最終的に自文化自身を維持・存続させるために機能する．「文脈文化的」は「態度」と同じように，検閲機能，選択的接触機能をもっている．

文化的文脈の種類——それは文化を構成する大まかな要素であり，文化の構造であると言ってもよい——は13個であると異文化間屈折理論は既に1978年の時点で述べている[18]一方，はるかに古い歴史をもつ態度の研究においてその構造はいまだ十分明らかにされていない．態度の3成分，即ち認知，感情，行動の3者関係をもって態度構造とする呼び方があるが，その考え方には筆者は賛成できない．この考え方は，ある特定の態度対象(それは「軍事侵略」や「自由主義的市場経済体制」でもよく，「グルメ・ブーム」や「ファッション」でもよい）に向けられた態度の中の2つないし3つの成分の間の一致・不一致関係，即ち「良い」と思うならば「好き」であり，それに「接近する」か否か，を問うものであり，飽くまでも一定の対象に向けられた態度の中の問題である．

一方，態度の一種であるイデオロギーの構造に関する研究においては，例えばそれは「保守——革新」，「国家主義——反国家主義」，「宗教的——反宗教的」という3つの次元から構成されている，といったようなことが分っている．このようなイデオロギー的態度だけではなく，「態度」対象全般にわたる構造の研究をすることは決して不可能ではない．その研究は決して容易ではないだろうけれども，「態度」の対象となるものが何と何であり，それらはどのようなまとまりをもち，そのまとまりはお互いにどのような遠近関係や強弱関係にあるかを研究するのが態度構造の研究であると考える．

異文化間屈折理論における文化的文脈とは文化を構成する諸要素を13のカテゴリーにまとめたものでもある．どの文化もこれらの文脈又は要素

をもっているのであり，文化を相互比較する時の基準になるものである．態度構造に関する研究も，個人間の態度の比較研究に寄与するだろうし，又異文化間の諸個人の態度の比較研究にも貢献するだろう．多くの研究者によって「価値」の比較文化的研究は既に多く行なわれているが，「態度」の比較文化的研究はまだ手がつけられていない重要な分野である．ある特定の対象に対する「意見」としての態度の比較文化的研究は無数にあるが，比較基準としての態度を構造的にとらえることはまだなされていない．

「文化的文脈」との関連で，次のような類推も可能である．「態度」は半年，1年，或は5年と，比較的長い間持続する安定したものであるが，いずれは変化する．その変化は説得や集団圧力によって生じるし，又自ら態度を変えていくこともありうる．

同様に「文化的文脈」も変化する．それは第1に，外来のイノベーションが変化しながらも自文化において普及し，広く定着することによってなされる．定着したイノベーションは逆に文化的文脈に作用して変化を促し，時にそれは社会変動すら引き起こす．マルクス主義というひとつのアイデアが形を変えて広く世界中に普及し，多くの社会主義国家を誕生させたのはその好例である．第2に，自文化において発生したイノベーションが時代の流れに合うように変化しながらも広く普及した時にも文化的文脈は変化する．自文化は時間的経過とともにいずれ異文化となる．異文化となった時点においては，以前の文化こそが異文化であり，今あるのは自文化である．前の文化であるところの異文化におけるイノベーションが時代とともに変化することは，「時代間屈折」とでも呼ぶべきものである．

文化的文脈は文化の中において網の目のように相互に関連をもちながら存在している．それ故に，一つの文化的文脈が変化すればその変化は他の文化的文脈にも波及し，それはやがて文化自体の変化をもたらす．個人の態度変容や価値変容はその構造が変化した時におこるように，文化変容も又その構造が変化した時におこる．前述のようにそれはそれを構成する要

素，換言すれば「文化的文脈」が変化した時である．態度変容や文化変容を研究する上で，その「構造」を研究することは不可欠であろう．

人は新しい状況，事態，環境，社会そして文化などに迅速に対応できるように，その情報処理の枠組である態度を変えていく．同じように文化も又，新しい時代に対応するためにその文化的文脈を変えていく．70年もの間マルクス・レーニン主義を掲げてきたソ連は今，時代に即応した新しいフィルターをかけ，新たな文化を作ろうとしている．新しいフィルターをかけ得なければ「個人」も「国家」も滅亡するしか道は残されていない．新しいフィルターをかけ，生き延びようとしているのがソ連や東ドイツなどの東欧諸国であり，フィルターをかけることすら拒否して滅亡したのがチャウシェスクの率いたルーマニアである．中国の指導部は「天安門事件」という，新しいフィルターをかける絶好の機会を戦車と血で塗りつぶしてしまった．中国が今後存続しうるか否かは新しいフィルターをかけるか否かにかかっている．

文化を擬人化して考えるならば，個人がホメオスタシス的メカニズムによって態度を保持するように，文化も又ホメオスタシス的メカニズムによって自らを保持していく．個人が態度を変えるのは，新しい態度を採用することによって新しい事態における情報処理を単純化し自らの態度自体を維持しようとする時であり，文化も又その文化的文脈を変えるのは，新しい文化的文脈を採用することによって新しい時代における情報処理を簡略化し自らの文化自体を維持しようとする時なのである．「個人」も「文化」もそのホメオスタシス的メカニズムによって自らの維持・存続が可能となり，その維持の役割を担っているのが，「態度」であり「文化的文脈」なのである．

注

(1) D. Krech, R. S. Crutchfield & E. L. Ballachey. *Individual in Society*. McGraw-Hill, 1962.

(2) G. W. Allport. Attitudes, In Murchison (Ed.), *Handbook of Social Psychology*. Clark Univ. Press, 1935.

(3) H. Spencer. *First Principles*. Burt, 1862.

(4) N. Lange. Neue Experimente über den vorgang der einfachen Reaktion auf Sinneseindrücke. *Phil. Stud.*, 1888, 4, 479-510.

(5) D. Krech et al. *Op. cit.*, 1962.

(6) M. Rokeach. Attitudes, In *International Encyclopedia of the Social Sciences*. Macmillan and Free Press, 1968.

(7) M. Rokeach. *The Nature of Human Values*. New York: The Free Press, 1973.

(8) D. カッツ (D. Katz. The functional approach to the study of attitude. *Public Opinion Quarterly*, 1960, 24, 163-204.) は，態度の 4 つの機能のひとつとして，筆者の指摘と類似の指摘をしているが，この点だけを特に強調しているわけではない．

(9) M. Rokearch. *Op. cit.*, 1968.

(10) M. Rokearch. *Ibid.*, 1968.

(11) L. Festinger. *A Theory of Cognitive Dissonance*. Row: Peterson, 1957.

(12) M. Rokearch. *Op. cit.*, 1968.

(13) L. Festinger. *Op. cit.*, 1957.

(14) S. E. Asch. Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgments. In H. Guetzkow (Ed.), *Groups, Leadership and Men*. Pittsburgh: Carnegie Press, 1951.

(15) E. M. Rogers. *Communication of Innovations: A Crosscultural Approach* (2nd Ed.). The Free Press, 1971. (宇野善康監訳「イノベーション普及学入門」産業能率大学出版部，1987 年第 5 版).

(16) Y. Uno. Inter-Cultural Refraction Theory. Unpublished paper Presented at the International Policy Research Symposium on World Communications. 1977, Berlin, West Germany.

(17) 宇野善康，澤木敬郎，鈴木孝夫，鶴見和子，鳥羽鈞一郎，野元菊雄「国際摩擦のメカニズム——異文化間屈折理論をめぐって」サイエンス社，1982 年.

(18) Y. Uno & S. Kubo. Inter-cultural refraction between East and West. *Yenching Institute Harvard University China Branch Bulletin*, 1978, Vol. 14, The Visiting Scholars Association.